

第 19 回スタディツアー感想

2019 年 7 月 13 日（土）～25 日（木）

うちの嫁さんの言葉は辛辣だけど的を射ている。

ぼくが「英語もベンガル語もベトナム語も覚えられない」と言うと「あなたは外国語をしゃべれるようになる前に日本語をもっとしゃべりなさい」と返される。当たりですね。語学力とか語学のセンスも関係あるけど、人と交わろう、積極的に言葉を口にしよう、というのができない。

初参加の高校生らはすごい。『指さしベンガル語』の冊子を片手に、覚えよう、声に出そうと積極的だ。感心する。岡さんも、ワンドロップ小学校 76 人の生徒の名前を覚えているし、ベンガル語も覚えて口に出そうとする。『指さしベンガル語』の冊子は毎回バッグの中に入れていますが、いつも無駄になっている。



タリクさんのマンションで、アナスくんがぼくのそばに来て言葉が出ない。仕方なくカメラの再生画面でたくさん写真を見せて照れ笑いしてその場をしのごう。

ぼくの奨学生のフマヤンくんとも、会う前に伝えたいことを日本語で考えながらグーグル翻訳で英訳してメモしておくしかない。

ワンドロップ小学校の子らは「ヤマナカ、ヤマナカ！」と声をかけてくれる。カメラを持っているから「自分を写してくれ！」とねだってのことかもしれないが、返す言葉がなく笑ってごまかしている。岡さんが小学生全員の名札をアルファベット表記で作ってくれ、そして、ぼくら日本人にはベンガル文字の名札も用意してくれた。しゃべれないぼくにも、子どもの顔を見て名札を見て、名前を呼んでやることができる。ぼくの名札を指さすとみんなが「ヤマナカ」と呼んでくれる。ただそれだけで、それ以上の関係にはならないが、とてもありがたかった。以前は、生徒が自分の名前を覚えてくれようとしても、聞き取れずに名前すらちゃんと呼んでやることができなかった。

大西さんも、岡さんも、次回 1 月までにベンガル語がしゃべれるように覚えてくる、とバングラデシュのみんなに約束した。すごい。ぼくにはむり。

人としゃべれないぼくは、自分でも本当に面白くない人間だと思う。今回タリクさんから「お金持ちさん！」とジョークを投げかけられた。そんな時も、一発ジョークを返せたら楽しいだろうに、ぼくは笑ってやり過ごすだけ。本当の金持ち、ということになってしまった。



みんなはジョークをポンポンやり取りして人間関係を深めていくのだろう。飛び交うジョークを聞くのは楽しいのだけど、その輪の中に入っていない。

もう一つ、嫁さんの言葉。

「あんたは余計なことは言わない！」と言う。べらべら無駄口は言わない人、という良い意味ではない。自分にとって都合が悪いこと、言えば自分に責任が降りかかってくることを避けている卑怯なところがある、というのだ。これも当たっている。

スカラーシップの 4 人の生徒が、前回 1 月、里親へ送る手紙がみな同じ文面をコピーしたものだった。大西さんは、自分で決断して彼らの奨学金をストップすると決めた。このことを聞いていた時、ぼくはその重い意味を判断できず、あいまいな態度のままで自分の意見が言えなかった。

バングラデシュとの関わりでこれを許してごまかしてしまえば、その関係は低い方に流れ、お互いの尊厳を守れなくなる。困っているバングラデシュの人たちのために支援活動をしているのだから、少しぐらいの

ことは大目に見てもいいのではないかと思ったら、その時点で相手の人格を貶めることになる。

バングラデシュだからこういうこともあり得る、仕方がないことという安易さを大西さんは許さない。ワンドロップの活動で、支援する側と、支援を受ける側との間でお互いの尊厳を認め合って対等な信頼関係を築いてきたのだ。4人の行為を見逃してしまえば、ワンドロップの側にとっても、バングラデシュの人たちにとっても、そういうことをしても許される関係としてお互いの存在を低めることになるのだ。



リキシャの料金でのやり取りも、たかが5タカ、10タカのことだと思うけれど、これを許してしまえば、大げさだけどバングラデシュの人たちは不当なぼったくりをするような人なのだと貶めることになるのだ。そこにこだわり続ける大西さんをぼくは尊敬する。

今回、4人に対面した時、彼らがやったことの意味を理解していないのを見取って、きっぱりと「あなたたちの顔は見たくない！」と大西さんは対峙した。ぼくは、そばにいて見ているしかできない。

彼らのやったことが里親をはじめワンドロップの活動を支えている人たちの心を裏切り、信頼関係を損なうことになったのだと気づかせなければならない。自分たちの軽はずみな行為の重大さに気づいて、ひとつ高みに成長してくれなければならないのだ。

何かことあるごとに、リキシャのぼったくりのことを思い返すのだけど、今回も4人の前に立ちはだかった大西さんを見て、こうやってワンドロップの活動は品位を保ってきたのだ、と気づかされた。

ぼくは、いつもその場で判断して発言することができず、言いたくても言いそびれたり、後追いかとおいしてからやっと言葉にすることが多い。

活動3日目、ナワブゴンジュの小学校を訪問し、奨学生との楽しい交流も終えて、夜遅くホテルに帰る車の中でのこと。ナワブゴンジュの奨学生はみんなスマートだ。人柄も信頼できる。中でもいちばんの好青年はノヨンくん。奨学生らのリーダー的な存在だ。そしてとてもハンサムで笑顔もすばらしい。で、高校生らが車の中でスマホに写った彼らの写真を見せ合いながら楽しそうにしゃべっている。若い子らはいいなあ、と思いながらも、ちょっと気になることが思い浮かんだ。

バングラデシュの子どもたちが日々暮らしている現実、この何時間かの和やかなものでは全くないのだ。一緒に写った笑顔は、日本の高校生にとってはそのまま日本での日常とは変わらない笑顔だけど、ノヨンくんらの笑顔の内には、水道もなく、食べるもの着るものにもこと欠き、家族の生活を支えて勉強するゆとりもなく、粗末な家の狭い一部屋で暮らす現実を背負っているのだ。彼らはそのことに気づいているのだろうか、と気になったのだ。

もう一つ、心配性のぼくは気になることがあった。この3日間はホテル住まい。明日からは、タリクさんのマンションにお世話になる。代金を払っているのではない。子ども2人の部屋二つを追いやって使わせてもらうことになる。食べることも何もかもタリクさん家族の厚意に甘えている。4人家族のマンションの中に8人も大勢がお世話になる。居心地悪いことがあっても若い子らが辛抱できるかな、と年寄りのぼくは心配だった（ほとんどぼくの取り越し苦労だったのだけど）。

ふだん無口で、言えば自分に責任が降りかかって来るのを避ける卑怯者だけど、後部座席にいたぼくは、前の席の大西さんに声をかけてしまった。「明日からタリクさんのマンション。いろいろ気を使わなければならないことがあるから、ホテルに帰ったらミーティングをしよう！」

なんでもない提案なのだけど、ぼくにとっては言った限り、ぼくの伝えたいことを言わなければならないのだ、と決心した。（大げさだが、



ぼくにとってはこんなひとことを言うのにも決心がいるのです)

大西さんからたびたび「何か気になることがあったら、山中さんも言ってくださいよ！」と催促されているが、あいまいな返事しかしなかった。

ミーティングは、コミッラに移動してタリクさんのマンションに住まわせてもらう際に気をつけなければならないことなど、大西さんから具体的な話があった。そのあと「何か言うておくことがあれば……」と大西さんから振られた時、気になっていたぼくの考えを言ってしまった。

ぼくはなぜ何回もバングラデシュに来るのか。ぼくには、貧しいバングラデシュの子どもたちの教育支援をしたいからという考えはない。「バングラデシュの人たち、子どもたちが好きだから」と言うことにしている。しかし、言いながら、ぼくの好きなバングラデシュの子どもたちというのは、スタディツアーの10日間ほどの出会いの場だけのこと。「やさしい」日本人が会いに来てくれる喜びから、いっぱい笑顔を見せてくれる。その時の笑顔が好きなんだけど、この子らの日常生活の現実、ぼくらが共に過ごすことができない過酷な日々なのだ。いつもは日本で快適な暮らしをしながら、時々楽しい出会いをして喜んでいいのかと思うのだ。「バングラデシュの人たちが好き」と言うとき、彼らの笑顔の内に抱えている現実を、自分の心と体で受け止めたうえでのことなのか、と考える。

スラムで病弱な体で寝ている子ら、マザーテレサの「死を待つ人の家」で障害を持ってベッドに横たわったままの子ら、停まった車の窓に来て、顔を押し付けるようにしてお金を乞う子どもや母親ら、バングラデシュの人たちみんなが好きと思って言っているのか、と自分自身に問いかけてみる。極端な考えをする変な人間なのだけど、そんな変なことをミーティングで言ってしまった。

この時のミーティングで、湯下さんは聞いていて怖くなるほどの気迫で大切なことを言った。スタディツアーでいっぱいいい出会いができていのは、これまでのワンドロップの誠実で地道な活動の積み重ねがあつてのことなのだということを見落としてはならない、という主旨だったと思う。ぼくも今回、湯下さんに言われてみて、そういうことなのだと思得した。



山村さんは、私たちの教育支援の活動は、貧しい人たちを助けるために良いことをしていると考えるのは間違っている、と言った。

ぼくも同じ考えだ。日本の快適な生活にどっぷり浸かっているぼくらが失ってしまっている、一人の人間としての生きる力(喜び、悲しみ、苦しみ、耐えて乗り越える力)をバングラデシュの人たちは持っている。持たなければ生きていけない。ぼくはそんな人たちに出会えること、出会って自分の生き方を考えさせられること、それが好きでバングラデシュに来ているのだと思う。

岡さんは「スタディツアーで大切なことをいっぱい体験することができている。そのことの意味を大切に考えたい」というようなことを言った。

明日からタリクさんのマンション生活で迷惑をかけないようにしよう、というミーティングが、初参加の高校生らにとっても、ぼくらにとっても、とても意義深い話になった。

<備忘録1>

今回の活動のあれこれ

1. 「手をたたきましょう」を歌う。子どもらの元気な歌声が校舎内に響く。
2. 7月七夕にちなんで、笹に七夕飾りを作る。短冊に願いごとを書いて笹につける。七夕の歌詞をベンガル文字で書いてもらって歌う。湯下さんが用意した七夕の塗り絵も色塗りして飾る。七夕伝説をヤスミンさんに翻訳してもらってラブリー先生が生徒に聞かせる。



3. 湯下さんがアート指導。奨学生との面談の際など、とても好評だった。みんな真剣で、きれいな作品を仕上げた。
4. 岡さんが準備してくれた名札を生徒がみんな付けて、とても役に立った。
5. 岡さんの糸電話（1、2年）がよかった。
6. 風車（4年）は、みんなに準備を手伝ってもらったのに当日は段取りが悪くてあせったが、子どもらは楽しんでくれた。
7. 紙飛行機、前回やった子らで折り方を覚えていた子もいた。3、4年全員がグラウンドで飛ばせた。
8. 高校生が、Kポップのダンス、柔道の技を披露して大好評だった。
9. ピアニカで七夕の歌を演奏する。
10. グラウンドで大縄跳び。
11. 体重測定。
12. モビール（3年）、縁取りしておいた切り絵を切り抜いてぶら下げる。ハサミが上手に使えるようになっている。
13. 掃除。グラウンド、校舎裏のゴミ拾い。教室の床、机など雑巾がけ。
14. 日本の小学生が書いてくれた手紙に、一人ひとり名前と一言を書き添える。
15. 日本で写真展をしている写真を廊下に飾る。
16. 絵本の読み聞かせ。トライヤルの中学生が、日本語の部分をもベンガル語に直した紙を貼った絵本を読む。



バングラデシュのラルモニルハットで図書館活動をしているモウスマさんが来てくれて子どもたちに絵本の読み聞かせをしてくれる。

<備忘録2>

1. タリクさんが8キロ体重減。白いあご髭をたくわえた風格のある顔になっている。最近事業がうまくいっていないこともあるらしくて、声に元気がないみたいだったけど、何日か一緒に過ごしているうちにジョークも飛び出し、いつものでっかい張りのある声にもどった。
2. アナス、ロシュミアは日本への留学を希望している。タリクさんも積極的だ。日本語学校への留学、そして日本の大学に進学。
3. 「ブッダのおじさん」に会えなかった。娘さんの学業がうまくいってなくて、そのことを気に病んで元気をなくしているらしい。そのためコミッラの奨学生との連絡調整がうまくできていないところがある。
4. 片脚が不自由な奨学生のハレマが、2か月前に結婚させられた。つらいことだ。ヤスミンさんの村のモビアも結婚させられてダッカへ行った。学校だけは卒業したいと、遠いダッカから学校に通って来ているとか。これがバングラデシュの現実か。切ないことだ。
5. コミッラの奨学生、ジュモン。翌日に家庭訪問の約束ができたその日の夜、数日前の自転車事故のケガで頭に血が溜まって病状が悪化。ダッカの救急病院に運ばれたらしい。お婆さんがCTの画像を見せてくれた。お姉さんがいて、奨学金を手渡す。健康保険の制度はないだろう。医療費がどうなるのか心配だ。
6. シアタースクールのアキさん。交流の際には元気にダンスもして、明るい笑顔だったが、頭の病気がときどき悪くなって、発作を起こすことがあるらしい。毎月1,500タカの薬を6か月吞んで、治らなければ手術が必要。医療費が心配だ。
7. シアタースクールのポーリー。お母さんが脳梗塞で倒れたらしい。



心配だ。彼女はいつもちょっと斜に構えたところがある子だが、今回そばに寄ってきて「ありがとう」と言った声がとても明るくて笑顔がよかった。

8. フマヤン。前回、彼が進学をあきらめてマイメイシンの村で農園をすると決心したのをうれしく思っていた。農園はうまくいかなかったのか、父のいるダッカにきてケーキ作りの仕事を始めた。しかし、窯でケーキを焼く暑さが耐えられなくて辞めたいらしい。ちゃんとした仕事に就くためにはやっぱり学校を出ておかなければならないと気づいたという。学業を続けるために支援を再開して欲しいと思っているのだろうが、考えが甘い。彼は今 18 歳、クラス 8 まで修了している。学業に戻るためには来年 1 月から 6 月まで土、日の塾で勉強し、6 月からクラス 9 がスタートするらしい。今の状態で支援をどうこうするのはできない。次回のスタディツアーまでの半年間、働いてお金を稼いで親を助け、勉学の意志をしっかりと固めること。それを見て判断する、と伝える。
9. ロヘマ。問題の 4 人のうちの一人。彼女は大西さんから通告を受けた翌日、12 時頃から父とともにタリクさん事務所へ来て、ぼくらが小学校から戻る 3 時半までずっと待ち続けていた。奨学金の支援がなければ学校を続けられなくなる。彼女は、自分のやったことを反省し、手紙も書き直して持ってきた。大西さんは、彼女が誠実に受け止めていると判断して、7 月分まではストップして 8 月から支援再開をすることにした。タリクさんが、この子の家の事情を考えたら、2 月からの分も支給するのがよいとの判断。タリクさんの助言もあって、里親に事情を話し、支援を継続することになった。
10. 他の 3 名については、通告されたあと、言われたことについてきちんと受け止め謝罪の気持ちを示しに来なければならないところだが、何の動きも見せなかった。ぼくは、誰かがこのことの意味を彼女らにきちんと伝え、次の行動を起こさなければ、と示唆してくれる人がいたらいいのと思う。怒られても、そのことの重大さに気づかず、ふてくされたままなのか、言われてもどうしていいのかわからないのか、悪いことをしたから支給を止められても仕方ないと思っているのか、このまま学校をやめてしまうことになるのか。過ちを犯したら教え諭して、反省させ、成長するのを支援するのが教育でもある。この子らとの関係がこのまま切れたままになれば、この子らを、人の誠意を裏切るダメな人のままで放置することになるかもしれない。できの良い優良な子よりも、できが悪い劣等生や落ちこぼれ、やんちゃ者の方が好きなぼくには、実際には無理なことかも知れないが、何かフォローできないものかと思ってしまう。ぼくらが帰ったあと、この 3 名について、タリクさんの方で、その後の事情をフォローして知らせてくれるそうだ。

11. ラブリー先生が、ワンドロップ小学校のランチを、毎日キチュリなどのご飯食を作ってくれることになった。ランチキャンペーンの一人月額 500 円の支援では足りなくなるのでアップせざるを得ないが、子どもたちが毎日昼ごはんでお腹がいっぱいになるのはうれしいことだ。



12. ラブリー先生の子供も（今 5 歳くらい）を、ワンドロップ小学校に入学させたいと言っているらしい。バングラデシュではよくあることらしいが、公平を欠くことから問題あり。
13. ジャスミン先生。先夫は働きに行ったサウジアラビアで死亡。再婚の夫との間にできた子が妊娠 7 か月。10 月はじめが予定日らしい。マタニティ休暇を 2 か月（10 月と 11 月）欲しいと言っている。出産後もワンドロップの学校で働きたいそうだ。問題は、彼女の夫が家出してダッカに出てしまい、行方が分からないこと。

14. ジョニさんとカディジャさん夫婦。

ジョニさんは故郷で学校を作りたいという夢を持っている。それもここ 2、3 年のうちに。支援を申し出る人もいるらしいが、そ



れには頼らない。自分たちが理想とする学校でなくなることになっては困るから。カディジャさんは、ダッカで日本語学校の先生をしている。今度ダッカへ来た時は、彼女の学校を訪問させてもらおう。日本語しか話せないが、ネイティブの話す日本語を聞いてもらえるだけでお手伝いになるかな。すばらしい夢に向かっている、さわやかな笑顔のお二人に拍手！